

花の饗宴

節子が生涯描き続けたモチーフである“花”。ときには抽象的に、ときには色とりどりに咲く花々をキャンバスにおさめました。「生涯で自信のもてる花一枚が描ければと思っているの」と語った節子。制作を続けていくなかで数多く描かれた花の絵を中心に、その画業を紹介します。

■花というモチーフ

1925(大正14)年、節子は第3回春陽会展で《自画像》とともに山茶花を描いた作品を出品し、女性初の入選作家として注目を集めます。20歳で華やかな画壇デビューを飾った節子ですが、夫である三岸好太郎を早く亡くし、3人の子どもたちの育てに追われながら、生活の合間に縫って制作を続けます。作品のモチーフはもっぱら室内に置かれていた花瓶やテーブルなど身の回りにあるものが中心でしたが、なかでも好んで描いていたのは“花”でした。

節子は花というモチーフについて、

花はじしん作るのも楽しみだが描くのも、花こそ女の生涯をかけて追求したい素材である。

アトリエの花瓶は、新鮮な花、枯れた花、骸骨のやうに水気きへ喪つた花、いづれもすがたく、私は花を自由自在に描きつづける。(中略)

花こそは女の心。あせやすく、命短い果敢なさといふなけれ。花の美しさは、いつも女心の求めてやまない美へのあこがれである。(注1)

と語っています。

時が経つにつれさまざまな表情を見せ、女心をくすぐる美しさがある“花”に魅せられた節子。やがて花というモチーフを、生涯にわたって描き続ける重要な主題とさせていくのです。



《花》1952年 ©MIGISHI

■各地で描かれる花

節子は1954(昭和29)年の初渡欧後、軽井沢・大磯・カーニュ・ヴェロンなど、日本とヨーロッパを行き来しながら、各地にアトリエを構えて風景画に挑戦し始めます。同時に、花を描き続けることは欠かしませんでした。現地で見つけた花やアトリエの中庭で育てた花を摘んで、お気に入りの花瓶や壺に生けたものを作品に描いていました。

私は環境ですが、作品がガラッと変わってしまいます。せがれが私によく、鷺宮で描いた花は鷺宮的だ、軽井沢で描いた花は軽井沢の花で、大磯で描けば大磯、ヴェロンで描けばヴェロンの花と、その土地の花を描くと申します。私は全然気がつかないんです。ああ、そうかなと思うだけで、環境の特色が花に非常に出てくるそうです。(注2)

当時の制作環境や気持ちの変化が花を通じて作品に自然と表れ、節子を隣で支え続けた長男で画家の黄太郎はそれを静かに感じ取っていたようです。

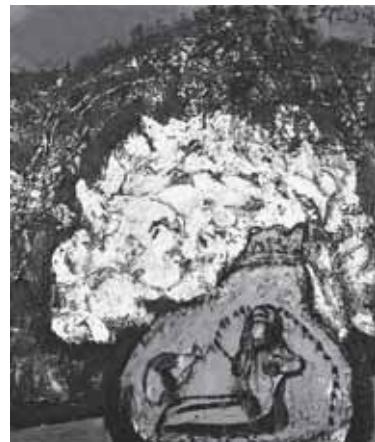
■花を描くことへの苦悩

“綺麗な花を見たとおりに描くことでは満足できない”と常々語っていた節子は、写実性に重きを置かず、抽象的な描き方を模索します。茎や葉を省いて花全体を簡略化し、絵具を幾重にも重ねて作り出す独特の絵肌と筆触で、花の生命力を表現していきます。

しかし、花を描くことに対する飽くなきその探求心が、ときに節子を悩ませることもありました。

「どうしたら“花よりいっそう花らしい”絵が描けるのか、どうすれば花がもつ不思議さや美しさをもっと画面に出せるのかー」

高みを目指すあまり、画商に「そんなに花の絵ばかりを描いていては売れなくなってしまう」と苦言を呈されたり、思うように絵が描けない日々が続いたら、苦悩する様子を自ら日記に残しています。



《花(ヴェロンにて)》1988年 ©MIGISHI

■花とともに一

一年中私のいる処はさまざまな季節の花で楽しませてくれる。

さいわいなるかな人生。

花あって眺めるよし。香りを楽しむよし。さて又描いてもよし。(注3)

節子にとって花は、生涯のモチーフでありつつも日常の楽しみのひとつでもありました。自ら花を植え育て、暇さえあれば庭に出て草取りをしながら過ごし、年中季節の花に囲まれて過ごしていたといいます。

なぜ花がこんなに好きなのか。

神様がお創りになつた造化の妙のなかで、こんな傑作がまたとあります。

こんなに愛らしくて、こんなに無邪氣で、こんなに可憐で、デリケートで、華麗なものがまたとあるでせうか。(中略)
この花をつくり、この花を描く。

人生にこんな楽しい生き甲斐がまたとありますか。蜜に集まり吸ひ寄せられる、蝶や蜂ならずとも、私もまた花とともにある人生です。(注4)

20年余りを異国の地で過ごし、1989(平成元)年に帰国した後は花を描き続けるとともに壺や瓶などの静物画にも再び取り組み始めます。美の象徴であり、生きることの喜びだった“花”というモチーフは、生涯描き追い求め続けたことで節子作品の代名詞となりました。

一宮市三岸節子記念美術館 学芸員 丹野 汀

(注1)三岸節子『花より花らしく』求龍堂、1977年、35頁

(注3)三岸節子『花々の譜』『花のデッサン帖』求龍堂、1984年、9頁

(注2)三岸節子『三岸節子自選画集 花こそわが命』求龍堂、1996年、114頁

(注4)三岸節子『花より花らしく』求龍堂、1977年、55頁